

「被災者」「支援者」ではなく、 地元の人間として一緒に活動したい。

3.11あの時
P37 Report. 17 の続きです

仙台市

足立 千佳子 NPO 法人まちづくり政策フォーラム

取材日 2012.06.22

関係諸団体との協働を基にまちづくりに関わる調査研究等を行ない、豊かな地域社会の形成に貢献する事を目指し活動に取り組む。震災後はRQ市民活動救援センター登米現地本部で、ボランティアの受付窓口や諸々の事務作業を一手に引き受ける「総務」を経験。その後女性のための支援センターを立ち上げ、被災女性の支援に力を入れている。

てしごとプロジェクトと地域の事情

被災地に暮らす女性たちのサポートを目的として、2011年6月1日にRQW（RQ 被災地女性支援センター）を立ち上げた。女性の仕事づくりに繋がるものとして、編み物や裁縫などの手づくり講座を県北沿岸地域の仮設住宅で開始した。

現地に入ってみると、私たちが思い描いていたイメージとは違うことが多々あった。9世帯からなる小さな仮設住宅では各家の女性たちが参加してくれ、集会場を仕事場として利用しつつ、手仕事をしないおじいちゃん・おばあちゃんも集会所に集まってきている。これが目指したカタチだった。ところが大所帯の仮設住宅では意外に手仕事は広がらない。あるいは、毛糸を持って家にもってしまい内職化してしまう。引きこもりを防ぎ仮設住宅内でのコミュニケーションを図ることを目的のひとつとして取り組んだので、これでは趣旨が違ってしまうと、スタッフ内で話し合い、月に2回のお茶っこ講座を開くことにした。1回は手仕事をする人たち向け、もう1回は地域の誰でも参加できる内容とし、皆が気軽に集まっておしゃべりできる場づくりをしている。

大島の仮設ではすでに別の手仕事支援が入っていたため、需要がなかった。一方で地元の方が「やりたいけれど、自分達は仮設に入っている被災者ではないしダメよね」と仰る。いやいやいや、大島全体被災しています、皆被災者ですよ！大島では仮設住宅ではなく、1つの自治会の婦人部を中心としながら手仕事を始めた。

4カ所でてしごとプロジェクトを展開しているが、地域ごとに事情が違う。声をかけるタイミングや、誰が声をかけたかで反応は違う。チャンネルが合うか・合わないかなら、こちらはたくさんのチャンネルを持つことが大事だ。

「さんざかほんざかすっぺし」

RQW東京スタッフをはじめ、多くのネットワークでエコタワシ「編んだもんだら」のタグができ、



あちこちで販売してもらうことができた。ところが、ボランティアの中にはお金を稼ぐことに違和感を覚える人もいる。話し合った結果、ちょうど1年となる2012年6月1日にてしごとプロジェクト「さざほざ」を独立させることにした。手仕事づくり・食・被災地の今を発信し、東北の暮らしの知恵をコミュニティビジネスとして展開していきたい。また、お母さんたちとネットワーク作りをしながら、「被災者」「支援者」という立場で関わるのではなく、地元の人間として一緒に活動をしたいと思っている。

「さざほざ」とは花巻・一関方面の方言で、宮城でも若柳の金成に近い地域で使われている。ある方がよく「さざほざとすっぺし」と仰る。それが好きで名前にいただいた。意味は「わきあいあい、気負わずに」。

タコは「新鮮に」編んで！

アクリル毛糸で編むエコタワシ「編んだもんだら」はタコやイカ、ツバキなど地域の特産品をモチーフにオリジナルデザインで製作している。編み図は使わず口頭で教え、仕様や指示書もない。すると、青い口のタコが登場することがある。お母さんたちの楽しい気持ちを壊したくないが、「青い口は寒そうです。口はチュッとしたくなるような色にしてくださいね」とお願いすることも。

最初は上手に編めないものだが、「上手に編んで」は禁句だ。ある時、上手に編めなかったタコを「水ダコになったべき」と笑い合っていた。会話に入っていくと「水ダコは大きいから大味でうまくね。志津川は真ダコがうまいんだ」と自慢された。なるほど、それなら「おいしそうに」と表現した方が良いのかしら。それから「イキよく編んで」「新鮮に編んで」と声をかけるようにしている。編み目がとんで穴が開いてしまったら「きつとヒトデに食べられたんだべ」と大笑い。え？ヒトデってタコを食べるの？と聞けば「そんなの知らねえけど、穴があいてるんだものたぶんそうだべき」とまた笑う。この空気感がすごく好きだ。きつと、「支援者」として現場に入っていたらこうはならない。いい加減で、ユーモアがあって、めんどくさがりだったり。お母さんたちの気負わない、ありのままの素の姿を見せてもらえる。だから楽しくて、日々遠いと思いつつも登米や南三陸、大島まで通っている。

コミュニティカフェ「うれしや」

宮城の放射能の問題は“風評被害”ではなく、“事故”で、“風評”ではなく被害はある。その中で私たちがどうやって暮らしていくのか考えたい。食べるという大事なことを考え、宮城の海と里と山をつないだ、美味しい食の在り方を発信したい。そのための場所として、2012年5月17日に「うれしや」をオープンした。

この場所はずっとマクロビオティックの喫茶店だった。前店主とのつながり、登米の農家さんとのつながり、多くの人のつながりでお店を開くことができた。店名は農家さんと一緒に「店が出せるなんてうれしいねえ」と話していて生まれた。うれしいという字は漢字で書くと「女の人が喜ぶ」で「嬉しい」になる。隠しテーマで、やっぱり女



撮影：2012.4.24
気仙沼市大島 編んだもんだら「水揚げ」作業

の人が喜ぶことをしたいと思っている。火・水・金はカフェを開き、月・木は現場へ出かける日が続く。現場の人たちとはお友達のような関係でありたいと思っているので、肩肘張らず、肩に力を入れすぎず、これからも楽しく活動に携わっていききたい。

大震災を振り返って

いろいろな人のつながりがあったからこそ、できたことがたくさんある。震災後に出会った人たちも、出会うべくして出会った人たちなのだろうと思う。

東日本大震災で大事に思っていた人たちを亡くした。その人たちの分も誠実に生きていきたいと思うし、あの震災から生き残ったのだから、多くのご縁に感謝して、日々丁寧に暮らしたいと思っている。



撮影：2012.5.14 南三陸町志津川「ひらめ」の編み方練習会



アクリル毛糸で編むエコタワシ「編んだもんだら」